てゐるのが目についた。又挿入の色刷地圖一葉は貧弱である。今少しく精密なるものを望むのは私一人だけではないであらう。

本辭典が今後號を逐うて編纂せらるべきものなるを思ひ、以上心づきしまゝを記して參考に供した次第であるが、項目の採擇に缺くる所あるは別として、その他の諸點は本辭典の價値を損するものではなく、全體としての出來榮えは甚だよい。私は敢て之を專門史家並びに一般讀書人にとつての好伴侶として推奬するものであるが、執筆者各位は本辭典の利用者の層の廣きを考へ、解説にはなるべく主觀的なる記述を避け、參考文獻を出來るだけ多く擧げてほしいと思ふ。本辭典の出現によつて、我が東洋史學研究が更に進展の歩を進め、一般讀書人の東洋に關する知識の愈ゝ深まらんことを祈つてやまない。〔外山軍治〕

## 昭和十年度東洋史研究文獻類目

水野清一、森鹿三修、增村宏、大島利一纂

本書は一昨年刊行された東方文化學院京都研究所「昭和九年度東洋史研究文獻類目」に引續いて、昭和十年刊行の日本、支那、歐米の諸雜誌、論集に收められた東洋史に關する論文を類別載錄した目錄である。採錄の範圍は同研究所々藏のものと限つてゐるのであるが、日本發行のものでは雜誌七十四種、論集十種、支那は雜誌五十五種、論集一種、西洋は雜誌三十一種、論集二種の多きに及んで居り、東洋史關係の目ぼしい雜誌は略ゝ網羅されてゐると云つて宜い。

此等諸雜誌に收められた論文が、日本支那の部及び歐米の部共に一般史、歷史地理、社會史、經濟史、政治史、法制史、宗教史、學術思想史附教育、科學史、文學史附音樂、美術史、考古學、金石・古文書學、民族學、言語文字學、書誌學、叢書・雜纂、辭典・類書、學界消息の十九門に分け、各門を更に子目に分つて載錄されてあり、(子目の分け方は日本支那の部と歐米の部とは違つてゐる)、又批評紹介は歐米の部では論文と並べ記して批評者の名を括弧に入れて之を區別し、日本支那の部では附錄として一括されてある。其の他に著者索引が夫々に附けられてある。

以上が本書の體裁の大概であるが、四千に近い論文を大した破綻もなく分類載錄し、更に各論文の頁數までを記して其の論文の內容を想見せしむる樣注意を拂つた編者等の勞を我々は先づ多としなければならない。扨、近時本書以外に大塚史學會高師部會編「改訂增補東洋史論文要目」、于武玉編「日本期刊三十八種中東方學論文引得」、劉修業編「國學論文索引」、歷史學研究會編「歷史學年報」、經濟史研究所編「經濟史年鑑」、其他「史潮」、「史學研究」附錄の文獻目錄等種々の目錄が世に送られてゐるのであるが此等の中にあつて本書が如何なる特色を有するかを以下述べよう。

第一に本書には一册の內に日本だけでなく支那や歐米のものまでが同一分類の下に收められてゐる事である。今日の東洋史學界に在つては支那、歐米の學者の業績を無視する事の不可なるは論を俟たない。本書の前年度版に於ては日本之部と支那之部とが別けられてゐたのであるが、今度はその區別が廢されて日・支の論

文は一樣に扱はれ、且歐米の部も同一分類に依つて並べられてある。論文目錄に於ける斯る試みは本書が始めてであり、彼此の對照に甚だ便利であつて相當の成功を收めて居ると云へる。なほ、昨年支那から出た「國學論文索引四編」には約二百種の雜誌が收められてあり、それに比べると本書の五十五種は大に劣る樣に見えるが、二百種の內には昭和十年中に發行されなかつたものもあるし、とるに足らぬ小雜誌もあるから、採錄を望むべきものは皆無とは云はぬが、殆んど無いと云つて宜い。歐米の部に就て云へば、コルヂエの「支那書誌」以後の適當な目錄がなく、我々は頗る不便を感じてゐたのであるから、本書の續刊によつて或る程度の便宜を得る事が出來るであらう。

次に分類の仕方に就て云へば、標準が非常に嚴密で脫落や過誤が少く、此の點本書は大に誇つて宜い。項目の立て方は恐らく編者等の最も苦心を拂はれた所であらうが、大塚史學會の「東洋史論文要目」が支那、朝鮮、滿蒙、臺灣、南海、西域、西藏、印度と地域に依つて大別して更に子目を分つに對し、本書は先に述べた樣に十九門に分類して更に子目が立てられ、各目の內に於て地域別に排列されてあつて、好箇の對照を爲してゐる。兩者とも夫々得失があり、其の可否を定めて了ふ事は難けるが、一言氣づいた事を云へば、日本支那の部、十二考古學「青銅器時代」以外に十一美術史「工藝」の項に銅器に關する論文があり、又、十四民族學「信仰」の項の外に七宗敎史に「支那古代宗敎」なる項が立てられて居る如きは編者等の一考を煩はしたい。尙、一論文は一箇所にだけしか載せてないので、所要の論文を檢出し得ぬことも起るが、斯る場合には「著者」索引が多少役立つであらう。

第三は附錄の「批評紹介」である。本書前年度版には、論文の題目と共に其に對する批評をも併記して好評を博したのであるが本書は單行文獻を採錄しなかつた代りに此の批評紹介の目錄に依つて、九年度發表の論文に對する十年度刊行物所載の批評を補ひ同時に單行文獻目錄としても役立てたものである。本書が同研究所々藏のものゝ目錄である以上、單行文獻に就いては完全を期する事は望み得ないが（殊に外國のものに於て）、斯樣に何れかの雜誌が批評なり紹介なりした文獻、云ひかへれば一應は學界が取上げた文獻のみを採錄した此の試みは、甚だ注目すべきであると思ふ。歐米の部の著者索引には此等單行文獻の批評者の名が出てゐるが、これはむしろ批評された文獻の著者の名を出した方が、今述べた樣な意味から云つて却つて便利だつたのではあるまいか。

以上が本書の特色の大要であるが、前年度版より一段と洗練されたすがたで本書が世に送られた事は慶賀に堪へない。今後とも續刊され更に充實されん事を切に望む次第である。（東方文化學院京都研究所發行、四六倍判、一三六頁、定價九拾錢）（藤枝晃）

フリヨドリヒ・マイネッケ

## 「歷史主義の成立」二卷

歷史主義の問題は、唯單に專門的に歷史を學ぶ人々にとつてのみならず、凡そ現代に生きて何事かを考へ、何事かを語らんとする人々にとつて、關心に價する重大な問題でなければならない。